

三教指歸



空 海



大庭好喜



目次

序章 この書物を書いた理由	1
第一章 亀毛先生の主張	3
第二章 虚亡隠士の主張	7
第三章 仮名乞児の主張	9

序章 この書物を書いた理由

文章を書く理由

人が本を書こうとする時には理由があります。私は心に強いものを感じたので、それを文章に著すことにしたのです。過去のすべての偉大な著書は、この作者の強い心情を書として著したものです。これらの偉大な著者と私は人格もその生きた時代も異なりますが、今ここで自分の想いを文章にして述べたいということは同じなのです。

私・空海の略歴

15才で偉大な漢学者からいろいろなことを学びました。18才で大学に入り、螢の光・窓の雪の故事に習い、いやそれ以上の想いで必死に勉強しました。

ところがある時、ある一人の修行僧が「人がもしここに示された修行法によってこの真言を百万遍となえれば、一切の教えの文章や意味を暗記することができる」というお経を示し教えてくれたのです。

熱心な修行と仏道への熱き思い

これを信じて、私は修行しました。生まれ故郷の四国の山や海で念誦しました。そしてその中で、修行の手ごたえを感じ、み仏の霊能を感得することもできました。そうしているうちに、私は社会における出世や金もうけに対する興味を失い、自然の中での生活に心惹かれるようになりました。

楽しそうで経済的にも豊かな貴族の生活もやがてははかなく消え去っていくと思いその無常さに心をさいなまれ、また体の不自由な人、乞食のような生活をしなければならぬ人々のいる社会を見て、この胸に苦しさを覚えるのです。すべてのものが私を仏道の道へと向かわせませぬ。誰もこの想いを止めることはできません。

著作の二つの動機

ところが、私が大学を中退して仏道修行に進むことに、親戚や友人は忠孝の道にはずれるとして大反対しました。しかし私は、過去の聖人である釈尊の教え、老子の教え、孔子の教えの一つである仏道に入ることが何故忠孝に背くことになるのだろうかと考えました。私には狩猟・酒・ばくちにうつつをぬかす癖があります。幼い頃の教育がいたらなかったのかもしれませんが。この癖に対する憤りと仏道に向かおうとする私に反対する人々に対する抗議の気持ちから私はこの本を書きました。

あらすじは、亀毛先生に儒教を虚亡隠士氏に道教を語らせ、最後に仮名乞児という僧侶に仏教の主旨を説かせ、蛭牙公子という放埒な青年を戒めるものです。『三教指歸』と名付け、三巻にまとめました。人に見てもらおうと思って書いたのではなく、前述のように自分の主張を吐露したいがために著したものです。

第一章 亀毛先生の主張

亀毛先生の風貌など

才能豊かで弁舌のたつ亀毛先生という人物がいます。彼は体格は立派で容貌にも恵まれています。中国の古典『易経』『書経』『詩経』『春秋』『礼記』や八卦の説などをすべて記憶しているほどの優秀な人です。彼が話を始めるや自然は生气にみなぎり、その弁舌は過去のどのような雄弁家をも上回るものでありました。

ある日、亀毛先生は兎角公の屋敷に招かれました。宴席が終わると兎角公は蛭牙公子という性格がねじれた粗暴で他人の忠告は聞かず、博打や狩猟にふける甥について話始めました。彼は因果応報など考えもせず、酔うまで飲み、飽きるまで食べ、女遊びに明け暮れる。他人はもちろん家族に対しても敬いの心などまったくありませんし、年長者のいうことにも耳もかたむけません。

兎角公からの要請

「人は環境によって良くも悪くもなると言います。どうか影響力のある亀毛先生から蛭牙公子に意見してさとしてやってくれませんか。」と兎角公は亀毛先生に頼みました。すると「人を教えて直すということはひじょうに困難なことです。」と亀毛先生は答えられました。兎角公は、「切れる刀には砥石が必要ですし、良く動く車には油が必要です。善い教えに触れれば彼も心変わりすると思います。どうか彼に語ってやってください。」と重ねて言いました。

亀毛先生の受諾

「もうこれ以上お断りすることはできません。私の力は不十分ですが、儒教からみた人間の生き方について語ってみましょう。本当にいたらない内容であるかも知れませんがお話いたしましょう。」

人の心は自然に快樂へ走る

「人は天地に則り、陰陽の性質を受け、手足などの身体をそなえて生まれてきました。しかし、賢人・智者といわれる人はまれで、逆に愚人・痴人と呼ばれる人は大勢います。それゆえ、善を望む者はひじょうにまれで、悪にふけて暮らす者はあまたいるのです。また、考え方や行いは人によって千差万別であり、計り知れないほどへだたっています。さらに人の心は善にはなじまず、自然に悪の方向に行くものなのです。一度ついた臭いなかなかとれないように、人の習性も改めるはとても難しいものです。人は環境に非常に影響されやすい動物です。また、外見は立派そうに見えても中身はまるで腐っているような人間もいます。学ぶことを知らず、肉を食らうことしか考えない、広い大空を見ようとしぬ人が多くいます。人がその考えを改めなければ、何代にもわたってさげすまれます。こんなはずかしいことはありません。」

善きものへ向かう生活

「宝石は磨いてこそはじめて光るものとなります。人間も切磋琢磨することによって善きものとなるのです。若い頃は善い生き方をしていなくても悔い改めて善人になった人間もいます。人間は人のいさめを取り入れて努力してこそ善くなるのです。学ばなくて、また教えに背いて善くなることなど決してないのです。学ばずにして悟り、教えにそむいて道理に達する人などこの世にはいないのです。人間は先人の教訓をわが戒めとしなければいけないのです。蛭牙公子よ、私の話を謙虚に聞いて、反省してみてください。」

蛭牙公子を叱る

「あなたは親をバカにし他人を見下し、人の痛みを感じとる心がない。寝食を忘れて狩猟や博打にうつつをぬかしている。清らかで節度ある態度はなく、むさぼりの心があるだけです。あなたは、肉は食べたいだけ食べ魚も食ふ。酒は浴びるほど飲む、仏教徒の苦行など全く気にもかけていない様子です。あなたはいつも女性に情欲をいただき、遊女とともにいる時は喜び、勉学をする時はたいくつがります。かつて、酒と食べ物があれば人生に悔いなしという人がいましたが、あなたはまさにそれではありませんか。

あなたは仏像を見てもよこしまな心しか起こさないでしょう。また過去の高僧の話など何も知らないでしょう。また、親の忠告を聞こうともせず、逆にそうされたことを恨んでしまう。親の気持ちなど分かれようとしぬ。さらに、他人の短所や欠点ばかりをあなたはあげつらいます。言いたいことを言い、言葉を大事にしない。このようなことを今まであなたは続けてきたのです。おいしいものをたらふく食べて100年生きて、豪華な服を着て喜んで、それでは鳥獣となら変わりません。親が病気なら、酒宴にも参加できず、腹の底から笑うこともできないものです。また、他人の心をおもんばかる気持ちがなくて人間と言えてしょうか。こんなことでは、外見こそ鳥獣とはちがいますが、中身は何も変わらないのではないですか。

人生の輝かしい目標について

蛭牙公子よ、あなたが悪に興じているその心を入れ替えて良い生き方をするなら、大成することができるのですよ。まず、親孝行に努めてみなさい。また、忠義に心を向けてみてください。さらに、学問に励めば、立派な人間になることもできます。書道にいとめれば、立派な書家にもなれるのではないですか。弓術を習い、修練を重ねれば、その道の偉人にもなれるのではないですか。また、兵法を学べば、農業に勤めれば、あなたにかなう人間などいなくなるでしょう。さらに、努力さえすれば、立派な政治家にも裁判官にもなれるでしょう。清廉潔白に生きれば、それなりの人格者にもなれるはずで。また、医術を学べば名医にもなれるのではないですか。技術を磨けば、名工にもなれるのではないですか。いろいろと例をあげましたが、ともかくその道に修養すれば立派な人間になれるのです。これらを成し遂げるには並大抵の努力では無理ですが、決して不可能ではありません。あなたも今後は、道をきわめ徳に従い、仁義礼智信を旨として生きなさい。寸暇を惜しんで学問に励めば立派な人間にもなれますよ。あなたも努力をすれば、文章づくり・弁舌の大家にもなれるでしょう。

学成った人の栄達の人生

もしあなたがこの前述のような境地に達したなら、多くの王があなたを必要としてやっきて、あなたの庭には葦が立つでしょう。また、国家の要職にもつけ、高い地位にもものぼれるはずで。そうなれば、あなたは有能な政治家となり、その名誉は子々孫々まで伝えられることでしょう。これこそ人生にとって最上のものではないのでしょうか。

人は善き配偶を持つべき

人間には良いつれあいが必要です。一生独身という生き方もありますが、美しく気立ての言い女性を選びましょう。結婚式は多くの人々の祝福を受けるでしょう。そして2人はかたく結ばれるのです。そして生涯そい続けるべきなのです。この契りこそ人生の快樂を約束してくれるものなのです。また、親戚を集めて楽しい宴会もできるでしょう。なんと楽しいことでしょう。

亀毛先生の結論

蛭牙公子よ、あなたも今までの生活を改め、今述べたような善い目標に向かって進みなさい。親孝行もできますし、主君に忠誠も尽くせます。また、先祖にも子孫にも誉高いものとなりますよ。孔子先生も努力して耕せば食糧が得られるように、学問を修めれば高い地位が得られるとおっしゃっています。

公子の応諾

亀毛先生の話が終わると、蛭牙公子はひざまずいて「よく分かりました。これからはあなたの教えのとおり励みます。」と言いました。それを見て兎角公は、「人間がかくも素早く変わることができることを垣間見て本当に感心しました。道教などにも過去より多くの奇跡のような言い伝えがありますが、先生の話で青年の心を変えさせたことに比べればたいしたことではありません。まさに先生の教えにまさるものはありません。今日のことは私の勉強にもなりました。」と言いました。

第二章 虚亡隠士の主張

虚亡隠士が話に加わる

さきほどから座敷のかたわらで、みすぼらしい恰好をした虚亡隠士という人がいました。彼はあぐらをかいていますが、亀毛先生にむかって次のように言いました。「自分の病気にも気づかず、人の欠点をあげつらう。そんな治療ならしないほうがまだよ。」と。すると亀毛先生はあわてて言いました。「もし私の道と異なるものがあつたらどうぞお教えください。」と。

道教を伝えるには人を選ぶべし

隠士は「道教はたやすく凡人には理解できないし、たやすく伝授してもらえないものでもない。」と答えた。人にはそれを受け入れるだけの能力がなければ、その教えは伝授しても意味ないし、伝授もされないのである。「そこをどうかお願いします。」と頼むと、「祭壇をつくって誓約をするならいくつもお教えしましょう。」と彼は言った。彼らはそれに従って、いけにえの血をすすって神に誓いました。

隠士の受諾

「分かりました。あなた方に不死の神術を授け、長生の秘術を説いてあげましょう。ここでは、心のままに生きることができるのです。」兎角、亀毛先生ら三人は「どうかお聞かせください。」と言いました。

仙人の道、誤解と正しい用心と

万物を創造する働きは平等であるので、人によって寿命が異なるのは、その人間にその理由があるのです。長生きの方法を示してみましよう。その前に一言言っておきたいのですが、長寿の道と世俗的楽しみを満喫することは両立しないということです。多くの悪を為しながら仙人のような生き方はできないのです。道教が間違っているのではありません。道教は伝授する人もされる人も後世のそしりを受けないような立派な人間でなければならないのです。また、虫けらさえ傷つけてはなりません。体液は一切外にだしてはならないですし、感覚に溺れないし、濃い味のものも食べてはならないのです。つまり、地位・お金・色欲などの世俗的なものから離れることができれば、仙人の道を学び、そこに到達することもできるのです。食べ物についていえばキビ・麦・豆な

どははらわたを腐らせるし、にら・ラッキョウ・にんにくなどは猛毒であり、豚肉や魚類は命を縮めるのものです。美人に触れること歌うこと踊ること大笑い、大喜びも避けねばなりません。これらができてこそ長寿の仙術が得られることも夢ではなくなるのです。

仙人となる道

食べる物を選ぶことにより病気を防ぐことができ、外部からの身体への災難を防ぐことができます。呼吸法を習得することが必要だし、薬草も必要とします。それらができればどんな奇跡的なことも可能となります。例えば、姿を消すこともでき、暗闇でものを見ることもまた水の上を歩くことも火を飲むこともできるようになります。また霊薬をつくることができれば、その起こせる奇跡の範囲はさらに広がるのです。千里も離れた場所に一瞬で移動することもできるようになります。

仙人のすぐれた境界

正しい修行をして仙術を身につければ、生命を何度も伸ばすことはできるし世界のどんなところでも自由に行くことができます。欲望もなく全く何でも可能な自由の身となることができるのです。

世俗への批判

世俗の人々の生活を見ていると貪欲に心を苦しめて愛欲に精神を焦がしています。衣服や食事のために苦勞をして、富にこだわります。わずかばかりの幸福に喜び、わずかばかりの不幸に身を焼かれる思いをしています。世俗の生活は、楽しんだと思えば悲しみ、地位を得たと思えばそれを失い、権勢をほこっていると思えば、おびえた生活をしなければならぬのです。そのようなものです。はかなく消える命をあたかも永遠に続くかのように考えています。人間の人生などはかないものです。

隠士の結語

世俗の喜びを求める儒教と天上の楽しみを求める道教とどちらがすぐれているかわかるでしょう。亀毛先生と蛭牙公子と兎角公は、道教を味わいたいと言いました。

第三章 仮名乞児の主張

仮名乞児登場

仮名乞児という仏道に学ぶ青年がいました。風采はさえず、見栄えもせず、貧しい生活をしていました。数珠以外はひじょうにみすぼらしいものでした。姿形もほんとうにみじめなものでした。市場へ行くものなら人々から石をなげつけられました。しかし、僧侶や在家の信者の中には暖かく接してくれる人々もいました。

乞児の修行生活

彼は、苦しい修行を多くしました。その修行はほんとうに厳しいものでした。着るものも食べるものもひじょうに質素でみじめなものでした。しかし、彼はそのような修行生活に満足し、楽しんでいるようでもありました。家屋もひじょうに質素なものでした。周りからはみすぼらしく見えたのですが、彼の志は崇高で彼自身は幸福そのものでした。

内心の苦悩を告白する

ある人が彼に言いました。「人間にとって最も大事なものは忠と孝です。自分の身を大事にすること、富裕であり地位が高いことが大事ではないですか。妻子以上に重要なものがあるでしょうか。孝行をしたくてもできなかった人もいます。あなたは親も健在だし官に仕えることだって可能です。それなのにどうして孝行を尽くしたり主君に仕えようとしないのですか。あなたは自分のためだけに生きているのではないですか。親や主君のために生きることが必要ではないですか。恥ずべき事だと思います。忠孝の道に生きるべきです。」と。すると、乞児は、あなたは何を忠孝だといっているのかを尋ねました。すると彼は「家において、親が快適に暮らせるようにすることです。」と答えました。「士官した場合には、学問を身につけ、民のために働き、主君に尽くすことです。」とも述べました。

乞児は感慨を述べる

忠孝とはまさにそのとおりだと思います。私は不肖の人間ですが獣とは違い、いつもこのことについて考えると胸がはりさけるような苦しい思いとなります。育ててくれた親への恩を忘れたことなど決してありません。両親の私に対する献身は、どんなに報いようとしても報いきれるものではありません。そのことを考えるとまさに断腸の思いです。私が心配しているのは、親孝行のできるまでに父母が健在であるかどうかです。私には、農耕をしようにも筋力がありません。仕官する能力はありません。うそをついて仕官すれば泥棒と同じです。本当に悲しい思いでいっぱいです。

大孝の道

親に尽くす小孝のほかにも多くの人々の幸福のために尽くす大孝というものがあります。親孝行のために自分の身体を損なうことは、親からもらった身体を傷つけるので決して孝行とは言えないのに孔子はそのことを良いこととしています。その道にかなっていれば小事にこだわることはないと思います。

真の忠孝を説く

私は愚かな人間ですが、常に両親・国家・人々のために功德を積んでおります。あなたは仏道を非難されますが、あなたこそ目の前の表面的な忠孝のみを追いかけけているではありませんか。見えないところで進んでいる善悪の結末をあなたは気づいていますか。物事は表面的な面だけではとらえられません。

乞児は兎角公の屋敷へ

仏道が忠孝の道であることを悟っていた乞児は黙々と仏道修行に励んだ。ある時彼はまずは空腹を満たすことが必要として、人里に托鉢に出かけた。そこでたどりついたここでたまたま、亀毛先生と虚亡隠士の論争を聞いて、はかない体で仮の世界に住んでいるのに彼らはそのことに気づかないでいると思いました。彼らは、自分の利益と欲望のために戦っているあさはかさである。彼らは自分こそ正しいと考えている。一方私は、仏陀の教えをつぐものである。慈悲と慈愛でもって彼らに接します。乞児は直接の論争を避け、2人に手紙を送りました。すると彼らは、それを見て、大乘仏教の広大な世界観・人生観に触れて全面降伏いたしました。「人間には自分が理解できないことが多くあるのです。あなたがたは、氷に彫刻したり、水面に一生懸命絵を描いているようなものです。愚かな者は良い結果を得ることはできないのです。」

仏教は全体の真理、儒教・道教は仏教の一部

「儒教・道教にも長短それぞれの意味はあると思いますが、まず仏法の基本についてお話ししましょう。あなたがたは本物を見抜く力を持っていますか。仏陀は中国に弟子を送り、彼らが孔子・老子となり表面的な教えを授けたとも言われています。これらのことも知らずにあなたがたは自分の教えこそ最高のものだと思っていないませんか。」

乞児は身分を明かす

虚亡隠士は乞児に「あなたはこの出身で誰の子で誰の弟子なのですか」と尋ねた。すると彼は「この世に自分の家などありませんし、私は誰もの父母であり妻子である時もあります。悪魔が師である時もあります。人間は永遠の輪の中で輪廻転生を繰り返しています。たまたま私は今ここにいるだけのことです。」と答えました。

地獄と天国について

隠士は「地獄とか天国とはいったい何のことなのですか」と聞きました。乞児は「善い行いをすれば天国に悪い行いをすれば地獄に落ちます。天国と地獄はどこかにあるよう

なものではありません。心次第なのです。このことを仏教を学ぶことにより私は知り得たのです。」と言いました。

仏教の開祖、釈尊について

「私の祖である釈尊についてお話します。彼の本願はすべての衆生をいつくしむものでした。彼に縁のある人は良かったのですが、そうでない人は悟りの世界を知ることもなくこの世のよごれた生活にひたりきっていたのです。釈尊は死の前に仏教と縁のなかった人々を救うために弥勒菩薩と文殊菩薩をこの世におくられたとのこと。私は、それで仏道修行を続けているのです。しかし、あまりにも困難な道で、迷いに迷っています。そして今ここに托鉢にきたのです。」

「無常の賦」(上)を詠う

そして仮名は、自分の想いをうたにして唱えました。「人の世の一生などは短く、はかなくもろいものです。感情などもうたかたなものです。人間の心は煩惱・三毒などによってさいなまれ、身体はあしたになればもろくにも散り去るやわかりません。どんな美貌も死んだあとは単なる屍です。腐った死体には誰も近づこうともしません。宝といえども生きているうちの束の間の喜びにすぎません。きれいな衣装、立派な家も生きている間の仮のものにすぎません。ウジ虫のわいた死体をみれば、どんなに親しかった人も逃げ去るでしょう。死んでしまえば何もできません。何と悲しいことでしょう。まさに無常です。金も権勢も生命を引き留めることはできません。」

「無常の賦」(下)

「死ぬと肉体はもとの形をとどめませんが、心は地獄に行きそこでは自由など全くありません。あるのは苦しみだけです。誰一人として抜け出すことも他人が助け出すこともできません。お金も何の役にもたちません。地獄から抜け出すことは決してできないのです。生きているうちに正しい道に向かって努力しないと、この地獄に落ちてしまうのです。地獄は決して逃れることのできない苦しみの世界です。生きているうちに光に向かって勉め励みましょう。」

その話を聞いて亀毛と虚亡の一人は気を失って倒れ、もう一人は悶絶して苦しみ始めました。そこで仮名は彼らに水をかけ、我に返らせました。「我々は、便所のウジ虫が臭いにおいになれるように、今まで何も知らず瓦礫のような教えをもてあそんでいました。」と言い涙を流してひれ伏していました。「今までの我々は目隠しをされて、危険な山道を歩いているようなものでした。」とも言いました。そして「私たちの教えは浅いものであることが分かりました。今後は仏陀の教えに従っていきたいと思います。」と言いました。「それではこれから大乘仏教についてお話ししましょう。」仮名は答えた。亀毛らは、「謹んで拝聴させていただきます。」と言いました。

「生死海の賦」(上)

仮名は教えを「生死海の賦」として述べ始めました。この生死の迷いの世界はまさに限界のない大海にも似たものです。大海はすべてを産み出すものになるものです。また

すべてのものを呑み込みます。大海は活力に満ちています。ここにはすべてが集まりますので、あらゆる怪奇も偽りも存在しています。ここに住む魚についてその生態について調べてみましょう。魚たちはみな、むさぼりの心、いかりの心を持ち、欲深く、愚かである。彼らは貪り、気ままに後の世で受けねばならない地獄の苦しみを考えることもなく、この世の価値だけを追い求めているのです。鳥類も偽り、へつらいを行い平気で悪事を働いています。彼らは道に背いて、自分の快樂の方向ばかりに行きたがります。彼らは好き勝手な生き方をしています。いつ捕まえられるかなど気にもしていない様子です。獣たちも自己中心の生き方しかしていません。すさんだ闘いの生活をしています。この世界ではすべての者が本能のままに快樂を求めて生きています。まさに、すさまじい状況です。あの世での地獄の苦しみを忘れて、この世の裕福さだけを求めて生きているのです。獣たちは、慈悲の心などなく自分勝手に行動し、殺し合いをしています。ここにいるすべての生き物は本能のままに生きています。上は有頂天から下は無間地獄まで存在しています。出家・在家信者はここから抜け出そうと「五戒」や「十善戒」に努めますが、簡単には抜け出せません。

「生死海の賦」(下)

これゆえ、われわれは仏陀に向かって進む心を持たないとここから抜け出すことはできないのです。そのために「六波羅蜜」と「八正道」を實踐して、脱出するための努力をしましょう。『法華經』により成仏への道を与えられるのです。

菩提と涅槃

こうして私たちは時間も空間も超越した菩提と涅槃に至るのです。どんな過去の偉人も到達できなかった境地です。仏陀はすべての人を救いに導かれるのです。苦難を乗り越え涅槃に至った仏陀の大慈悲の呼びかけに向かって多くの人々が集まってきます。すべてのものが集まり、仏陀の教えに耳をそばだてます。仏陀はすべての人に平等に説かれ、各々がその能力に応じて理解していきます。彼の説くものは人間の計らいを全く超えたものです。人々は人生を楽しんでいますが、彼らは気づいていませんがそれはまさに仏陀のおかげであるのです。仏陀はすべての人にその智慧を説かれます。仏陀による心の自由と平和こそ人々が帰っていくふるさとであり、究極の光なのです。仏陀は道教の儒教の師も及ばない広大で気高いものです。

「十韻の詩」で本書を括る

迷いの世界では人々は快樂を求めて奪いあう。一方悟りの世界では、儒教・道教の師ですら安らかな境地を与えられます。二人はただ聞き入っていました。私たちは、この仏陀の教えに出会えて喜んでいました。儒教・道教の教えは一面的です。仮名乞児は儒・仏・道を明らかにする「十韻の詩」を作ったと言いました。

十韻の詩

三つの教えは我々に光明を与えてくれます。人の性質はそれぞれであるので、その心の闇を取り除くのも多種多様であります。儒教を学ぶ人も道教を学ぶ人もいます。ただ、仏の説く一乗の教えこそ最もすぐれたものです。この世界はすべて無常の世界で涅槃の境涯こそが目標なのです。この世は束縛に満ちた世界です。世俗的な地位などは捨て去らなければならないものです。

三教指帰

著 空海

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
